

「ネットいじめ」事件に関わって

—トラウマと孤立

白鳥

勲

さいたま教育文化
研究所事務局長

昨年10月10日にさいたま市の中学3年の女子生徒が自宅で自殺するという痛ましい出来事がおきました。2週間後に机の引き出しに遺書が挟まれているのを母親が見つけました。遺書には「お母さん、お父さん、今までありがとうございました。ごめんください。私はもう生きることにつかれました。周りの人も私がいないと楽でしょう。みんな私何も知らないと思っていたでしょう。私は見て分かりますよ。誰が嫌われているとか。何もしらない転校生だからと嫌いな人を必死で

おしつけようとしているのが見え見えでしたよ。――略――遺書の最後にはプロフに自分の悪口を書いた加害生徒の実名をあげてうらんでいることを書いていました。

プロフに
「うまくすれば不登校になる」

この生徒は6月下旬に横浜市の中学校から転校してきました。転校直後から自分に対する周りの生徒の接し方に不自然

さを感じて、携帯でいわゆる「学校サイト」をたどるうちに、同じクラスの生徒のプロフに、あきらかに転校生である自分を特定して「きもい」「うまくすれば不登校になる」「プールと一緒にはいりたくない」という書き込みがあるのを目にしてしまいました。

その日から「恐くて学校にいけない」状態になりました。母親がプロフのこと、学校にいけないことを担任に連絡したところ、担任は「やはり、そうでしたか」といつて書き込んだ生徒の調査を約束します。数日後、書き込んだ生徒が判明し、2名がネットいじめの被害者の家నికిて、謝罪しました。

翌日、登校するのですがクラスで誰も話しかける人がいなく「針のむしろだった」（母親への訴え）ので次の日から夏休みに入るまでの3日間、学校にいけないようになりました。

夏休み明けの9月からがんばって登校します。10月10日に自殺するまでの40日間、学校では「明るく普通に生活」――担任などから見えて――していたという事です。しかし、母親には「クラスは鎖国状態が入っていけない」（9月中旬）、「男子のボール遊びでわざと当てられた」

(10月)と言ったり、なくなる2日前には帰宅して「あのクラスはもういやだ」と泣いたこともあります。そのころ、放課後に学校のトイレ前で泣いているところを隣のクラスの生徒が目撃しています。

勉強、友人関係など多くの面で不安感を持つ転校直後にネットいじめをうけ、それ以降もクラスの仲間にとけこめないという「孤立感」を抱き続け、精神的に追い詰められた状態で自死に追い込まれたのではないかと思います。

「いじめは確認できなかった」 — 学校側の対応

思いもかけない子どもの自殺という事態にご両親は茫然自失する日々を過ごします。我が子の悩みを見抜けなかった自分たちを責めました。2週間ほど経って、子どもの部屋を片づけはじめて遺書を発見しました。遺書に書かれたようないじめが続いていたのではないかと、学校生活でいったい何があったのかを校長、市教育委員会に問い合わせます。

1、どのようないじめがあったのか明らかにしてください。

・ 回答「ネット上のいじめが、7月に1回ありました。そのことについて、関わった生徒を指導し、相手に対して謝罪しております。その後、いじめについてはないと認識しております。」

2、学校管理下で起きたことに対し、責任の所在を明らかにしてください。

・ 回答「一般的にネット(トラブル)上については、学校が管理できるものではありません。」

3、加害者から謝罪が行われるよう、取りはからってください。

・ 回答「すでにネット上のいじめについては、謝罪をおこなっています。」
ご両親にとつては不誠実きわまりないと思われる回答がなされます。ご両親はなにか校長、市教育委員会に足を運びますが冷たいとしか言いようのない対応を受けました。

困り切ったご両親は、つてをたどって12月初めに当研究所の白鳥まで相談にこられました。事情をお聞きして、学校・教育委員会への要望書、申入書の作成、弁護士との相談、さいたま市教育委員会委員長・教育長・校長との話し合い、マスコミへの対応などのお手伝いをしてき

ました。

この間、多くのことを感じ、学びました。そのごく一部を報告し、今回のような悲しい出来事が二度とおきない、おこさないためにわれわれ大人がどのような認識で子どもたちと付き合うことが大切かを共有する一助となることを願って筆をとりました。

トラウマを引き起こす ネットいじめ

「ネットいじめ」について、多くの大人は子どもたちが軽い気持ちで特定の子の悪口、誹謗中傷を書き込んでいるので、さして深刻ないじめにあたらな思っているし、私自身もそう思っていました。

しかし、携帯が他者とのコミュニケーションの最も大切な手段となっている今はその認識はあまいといえます。携帯が彼等の生活の重要な部分となっており、授業中も含めて片時も携帯を離せない、携帯をいつも身近においていない不安だという生徒が多数派になっています。

誰もが持つっていて、誰もが見ることが可能なネットに「きもい」「うまくすれ

「不登校になるかも」と書かれ、それがクラス、学校中の生徒に見られているかもしれないと知ったときのショック、衝撃ははたいへんなものと考えられます。

ましてや転校直後というタイミング、年代としても不安定で他の人たちの評価、視線がもつとも気になる時期でのことです。屈辱感、恐怖感、無力感で心的外傷（トラウマ）を引き起こすことは充分考えられます。一度、傷ついた心、精神は回復までに長い時間がかかります。

「孤立感」をいだかせないこと、不安をなくすような環境、安心できる「居場所」、時には専門家による丁寧なケアが必要です。注意すべきことは心に傷をもつた子がそのことを周りの大人にストレートに表すわけではないということ。身近な大人に心配をかけまいとしたり、自分の「いたらなさ」と自分を責めたりして、表面上は健気に「元気そう」に振るまったりします。

「ネット上のいじめは1回あった。そのことについては謝罪した。その後、いじめはなかったと認識している。」という学校長の回答、認識はいじめ被害者の立場、心理を無視したものといわざるをえません。いじめで受けた被害者の傷は

1回の「謝罪」で癒されるほど軽くはないのです。今回のケースでいえば、謝罪後の被害者への丁寧なフォローこそが最も必要なはずですがそのような取り組みはほとんどなされませんでした。

暴力など肉体を傷つけることによる心的外傷と全く同様に、言葉、振る舞い、ネットによる攻撃は心・脳に深刻な打撃をあたえます。そのことをわれわれ教職員は常に心にとめておくべきです。

あらためて「いじめ」とは

12月以来の校長や関係職員とのやりとりで感じたことは「いじめ」とは何かについての理解・認識の薄さ、「軽さ」でした。暴力をふるったり、目の前で悪口を言ったり、仲間はずれをしたりというような表面的な「事件」がおきないといじめがわからないという教育現場もまだあるということです。多種多様な仕事に

忙殺されて、子どもたちと深くかわかわれない状況があります。文科省は2006年にいじめの定義を見直しています。「児童・生徒が、一定の人間関係にある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じている

もの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」としています。この定義のもつ意味をよく考えずに、表面的な「いじめ調査」をやったものですから「2学期にいじめはなかった」という回答がなされました。

ご両親や私たちの要望で3月中旬に「再調査」を3年生全員に行いました。その結果、3年生の2学期になっても「暴力、悪口」などのいじめを受けたと答えた生徒が20%を超えていました。表面的な「いじめ」でさえも教職員が把握することのむずかしさを感じさせられます。

さらに、「いじめを受けて精神的な苦痛を感じている」被害者に対して、身近にいる大人―教職員、保護者など―がどのように支えていくかという取り組みの不十分さを痛感しました。

いちばん恐いのは「孤立」

これまでの教職員生活での体験、そして今回のいじめ自殺事件を通じて考えさせられたことは年齢を問わず人が生きてゆくうえで、最大の危機は「孤立」することではないかということです。「自分

の部屋しか居場所を持たない人たちは自分の部屋さえも居場所ではなくなってしまう。人間は自宅と学校、職場、サークル、ネットコミュニティなど複数の居場所がないとたない生き物ではないか。(湯浅 誠)

中学時代に数人の生徒から「サンドバッグ」とあだ名されて、いつも肩パンチを受けていた私の教え子がありました。その生徒がおとなしくて何をしても刃向かってこないということで、数人の生徒の「ストレス」発散の道具にされていたのです。理不尽きわまりないいじめに耐えた中学校生活だったと彼は振り返っていました。

彼が死なないですんだのは「学校であったことは実はなかったこと」と思いこむ」と、家に帰ればゲーム仲間と一緒にいてくれて、ゲームをやったり、おしゃべりをしたり、孤立無援状態ではなかったことが原因だと話してくれました。その仲間ははじめのことは知っていてもそのこと自体は話題にできなかったけれど、ずっと一緒に過ごすという行為で彼を支えてくれたのです。

今回の痛ましい自殺も、転校直後のいじめ、そしてその後の孤立無援状態が彼

女を追い詰めたのではないかと思えます。

心と体子どもたちに

さいたま市だけでなく、全国で深刻ないじめ事件が絶えません。そのたびに「人権教育」「道徳教育」「心の教育」が強調されます。しかし、どんなに通知・通達で「心のもちかた」を指示してもいじめ事件はいっこうに減りません。

「仕掛けられた競争主義」、子どもたちが「伸び伸びと生きる」ことをゆるさない不自然な「数値目標」の導入、学校生活で失敗を許されない「負け組にならない」という強迫観念など多くのストレスがいじめ事件の背景にあることは多くの教育関係者が指摘しています。支え合うことよりも仲間に「負けない」ことが大切という雰囲気の中で生活しています。

いじめやトラブルは今のような社会状況では乱暴にいえば「必ずおこる」という構えで毎日を過ごすべきといっても良いのではないのでしょうか。私自身はそういう心づもりで教職員生活をこれまでやってきました。社会状況だけではなく、子どもはいろいろなトラブルをおこしな

がら成長していきます。

いじめがあったとき問われるのは、普段・いじめが表面化していないとき、日常的にどれほど教職員を含めたまわりの大人達が子どもたちと「本音で」「心を開いて」つきあっているかの質と量です。大人達がごく自然に「全身を目として耳として」子どもたちの様子を見つめているかそして見つめたことを互いにリアルタイムでエピソードとして語り合っているかどうかが問われます。

いじめやトラブルが子どもたちの「人生勉強」になるか、「トラウマ」になるか、死につながるかは生徒たちとの心の回路がつうじているかにかかっています。よって、身近な大人の「心と体が子どもたちにひらかれているか」がなにより大切になってきます。

今、いじめばかりでなく、学校教育に関わって問題が山積しています。その解決は当たり前のことですが目の前の生徒たち一人一人・「全員」とまずは丁寧に関わることに断言できます。そのための条件作りに教育行政は責任を果たすべきです。

教職員を数値と成果で競わせ、書類づくり・点検管理と競争に勝てる指導のた

めにエネルギーを費やさせる現在の教育行政ではいじめ問題は悪化するばかりです。

このことを今回のいじめ自殺事件はあらためて示したと言えます。

ネット問題の背景 —「ゆがみ」の克服を

ネット問題を考えるというテーマでしたが、いつのまにか、「いじめ」を通して人と人のつながり方をいかにつくるかという問題を書いてしまいました。

互いの情報交換にとつてもつとも便利なツールであるネットやケイタイが、人間関係、社会関係のありようで、他を傷つけたり、マインドコントロールの武器になりうることは多くの事実が示しています。現実の社会にある「ゆがみ」「理不尽」さを克服しないかぎり、ネットの影はいつまでも消えません。

講演会 おさそい

講師 世取山 洋介さん（新潟大学准教授）
～新自由主義教育改革への対抗軸とはなにか～

「クレスコ3月号」での話しをさらに充実した内容でせまります

7月3日（金）午後6時30分～

埼玉教育会館 2階ホール

〈 主催 子どもと教育・文化を守る埼玉県民会議 〉